地方と若者をつなぐ関係人口創出イベントが自治体にもたらす変革

高橋 亜由美[*1]
指導教員：草野 昂志郎[*2]・白石 利夫[*2]
Email:koshiro_kusano@shotoku.ed.jp

*1：聖徳学園高等学校３年
*2：聖徳学園中学・高等学校

◎Key Words　　地方創生，関係人口

1.　はじめに

本研究は，高校 1 年時に参加した地方創生イベント「Region Link」を通じて得た知見と，熊本県における現地調査，自治体・学生へのアンケート結果をもとに，関係人口創出イベントが地方にもたらす影響を明らかにするものである。調査結果から，学生が関わることによって地域側にもたらされる活性化の兆しや，学生自身の意識変容が確認された。本稿ではこれらの結果を踏まえ，若年層の関与が持続可能な地域づくりに貢献し得る可能性について考察する。

2.　本プロジェクトの概要

2.1　背景と問題意識

日本各地では少子高齢化や若者の都市部流出により，地域社会の存続が危機的状況にある。こうした中，地域と外部の人材をつなぐ「関係人口」という概念が注目されている。関係人口とは，定住・移住ではない形で地域と関わりを持ち，地域づくりに貢献する人々を指す。観光客とは異なり，継続的な関係性を築く点に特徴があり，地域活性化の新たな担い手として期待されている。

また，政府も近年地方創生の文脈の中で関係人口の創出に力を入れており，内閣府は「関係人口ポータルサイト」を開設し，様々な先行事例や政策情報の発信を行っている。このような政策的背景の中で，若者を対象とした関係人口創出イベントが各地で実施されている。学生の柔軟な視点や行動力は，地域の課題に新しい風を吹き込む存在として注目されているが，その影響を定量的・定性的に評価する研究はまだ少ない。

私は高校１年時に，全国の高校生が地域課題の解決に取り組む地方創生イベント「Region Link」に参加し，熊本県熊本市を担当した。現地でのフィールドワークや熊本市長との対談を通じて，地域と学生が双方向に学び合う関係性の重要性を実感した。本研究では，このイベントを事例として，学生が関わることによる地方への具体的な影響を明らかにするとともに，関係人口の担い手としての学生の可能性について考察する。

写真１ 地方創生イベント「Region Link」の様子

2.2　調査・事例紹介

私は，高校 1 年時に参加した課題解決型イベント「Region Link」を通じて，地域の既存制度に潜む課題に気づくことができた。熊本県熊本市におけるフィールドワークの中で，農業の担い手不足が深刻化している現場を目の当たりにして，特に人手不足の影響を受ける高齢農家の現状を知った。この経験から，地元の高校生が授業や課外活動の一環として農作業を手伝う仕組みを提案したところ，実際に熊本市により市政提案として採用された。この事例は，高校生の視点が地域課題の発見に有効であり，行政にも受け入れられる可能性があることを示している。

このように，高校生が地域と直接関わる機会を通じて得られる学びや発見は非常に大きく，それが実際の制度改善にもつながり得るという点で，今後ますます若者が地方創生の現場に参加していく意義は大きいと考える。学生は未熟であると見なされがちだが，柔軟で現場に寄り添った発想は，地域にとって新たな価値を生み出す重要な原動力となり得る。

写真 2 熊本市長との対談の様子

これらのことを踏まえイベント後，私は参加した高校生7名と各自治体の担当者6名にアンケートを実施した。参加者に対しては，イベントへの満足度や地域への関心，将来的に関わる意欲について尋ねた。その結果、多くの学生が「関わり続けたい」「地方創生に引き続き関心がある」と回答しており，関係人口創出の初期的な接点として本イベントが機能していることがうかがえた。また，自治体職員の100%が「高校生が参加して良かった」と肯定的に回答しており，そのうち約 83%が「とても良かった」と高く評価した（図2)。理由としては，「斬新なアイデアがあった」「若者の視点に刺激を受けた」「地域課題に前向きに取り組んでくれた」などが挙げられた。

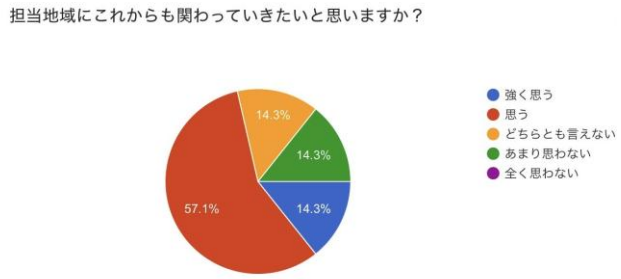

図 1 担当地域への関心に関するアンケート(n=7)

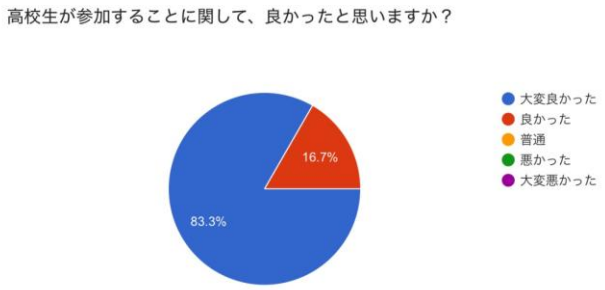

図 2 高校生の参加に対する自治体の評価(n=6)

2.3 仮説・分析

本研究では，「学生が地域課題に触れることで，地方への関心と継続的に関わる意欲が高まる。また、それが地域側にとっても将来の担い手や応援者となり得る関係人口の礎となる」という仮説を立てた。アンケート結果から，参加した7人中5人が「今後も関わりたい」「地方創生に関心がある」と回答しており，イベントを通じて地域に対する意識変容があったことが読み取れる。

一方，参加自治体の側からも「高校生の参加は非常に良かった」と回答した自治体が100%を占め，その理由として「斬新なアイデア」「地域活性化の新しい視点」「若者のエネルギーに感動」などが挙げられた。これらの結果から，短期間であっても現地での交流を含んだ関係人口創出イベントは，学生にとって内発的な動機づけとなり，地方自治体との将来的な関わりを促す可能性を持つと考えられる。

3. 結論と提言

本研究では，高校生が参加する関係人口創出イベントの意義とその効果について検証を行った。その結果，参加した学生と地域の双方において，高い満足度と今後の関与への意欲が確認され，関係人口の「きっかけ」としての機能が有効に働いていることが明らかになった。

また，本研究では自治体職員への自由記述から，「悪かった点は特にない」とする意見が多く見られた一方で，「現地でのサポートが十分ではなかったことが反省点である」といった声も確認された。これは，高校生が地域の課題に挑戦するにあたり，受け入れ側の体制整備が十分でなかった可能性を示している。さらに，「地方創生やビジネスに高校生が取り組むことを周囲に理解してもらうのに苦労した」という声もあり，高校生が安心して参加できるよう，今後の場づくりが重要であるといえる。

今後はこうしたイベントを一過性に終わらせることなく，継続的な交流やオンラインでのフォローアップ体制の整備が求められる。また，地方自治体側も，若者の意見を積極的に取り入れられる仕組みや，学生が関われるプロジェクトの可視化など，「関係しやすい地域づくり」を意識する必要がある。

学生は，未来の関係人口の中核を担う存在である。教育と地域をつなげるこうした取り組みは，双方にとって新しい可能性を開く鍵となる。

4. おわりに

本研究では，高校生が参加する関係人口創出イベントの意義とその効果について検証を行った。その結果，参加した学生と地域の双方において，高い満足度と今後の関与への意欲が確認され，関係人口の「きっかけ」としての機能が有効に働いていることが明らかになった。

また，地方自治体側も，若者の意見を積極的に取り入れられる仕組みや，学生が関われるプロジェクトの可視化など，「関係しやすい地域づくり」を意識する必要がある。

さらに，熊本市でのフィールドワークを通じて提案した地域農業支援のアイデアが市に受け入れられたことは，高校生であっても地域政策に現実的な影響を与えることができるという証明であった。高校生の持つ柔軟な発想や行動力は，行政や地域社会に新しい風を吹き込む存在である。今後は，こうした若者が安心して挑戦できる環境を整備し，地方創生の担い手として継続的に関われる仕組みづくりが重要である。

学生は，未来の関係人口の中核を担う存在である。教育と地域をつなげるこうした取り組みは，双方にとって新しい可能性を開く鍵となる。

謝辞

本研究の執筆にあたり，ご指導くださった草野先生・白石先生に深く感謝申し上げます。また，「Region Link」を主催したRX DAOの上田敏孝様には，アンケート作成など多方面でご協力いただきました。さらに，アンケートにご協力いただいた高校生 7 名と，6 自治体の職員の皆様（宮城県仙台市，岩手県岩泉町，群馬県南牧村，香川県琴平町，広島県神石高原町，熊本県熊本市）にも厚く御礼申し上げます。